ヤオコー会長　川野 幸夫氏 ㉕

～HISTORY～ 暮らしを変えた立役者

「子供は母親」妻に感謝

弟から次男へ社長継承

2013年4月、ヤオコーの社長に私の次男、澄人が就任しました。彼が37歳の時です。2000年代前半に私と弟、そして経営企画室長の3人で相談しながら作成した「後継計画」には、私から弟へのバトンタッチはもちろん、弟から息子へのそれも決めてありました。この2度の社長交代が当初のスケジュール通りスムーズに行われたのは、おかげさまでヤオコーが着実に、しかも順調に発展してきたからです。

澄人は01年に入社し、まず経営企画室に配属されました。会社の概要を大きく把握させるためです。1年後に店に出て、担当者、主任、次長、そして店長と、店の仕事をマスターしていきました。その後、商品部でバイヤーやグロッサリー部門の責任者などを任され、いろいろな経験を積んでいきました。一連のキャリアデベロップメントプランは全て弟に任せました。

私は息子にヤオコーに入社してほしいと言ったことは一度もありません。入ってくれたらありがたいなと思っていましたが、息子には自分の人生を思ったように歩んでほしいと考えていたからです。自分の進みたい道を母に言い出せず、大切な青春時代の一時期をうじうじと過ごしてしまった私自身の苦い経験や反省もありました。

前にもお話ししたように、私はヤオコーの仕事にかまけて家族との生活は相当ないがしろにしてしまいました。子供たちと一緒に遊んだり、旅行したりすることもめったにありませんでしたし、日ごろから親しく会話することもあまりなかったのかもしれません。

次男の澄人（写真中央）は37歳でヤオコーの社長に就任した

息子たちのしつけや教育は全て妻任せでした。必然的に息子たちの相談相手も妻でした。ですから私は息子のこともほとんど分かっていなかったのだと思います。

そんな私が息子と2人だけで、2年間東京で暮らすことになります。1990年に澄人が東京の高校に進学することになったからです。当時、私たち家族は埼玉県小川町に住んでいました。小川町からでは東京への毎日の通学は無理です。ヤオコーの本部は既に川越市に移っていましたので、川越の近くに引っ越すつもりでいたのですが、長女に反対されてしまいます。中学は小川町で学びたいと言うのです。おとなしい性格で、仲間の中に入っていくのに時間のかかる子でしたし、13歳という難しい年ごろでした。父親らしいことをほとんどしてこなかった私ですので、妻の判断に任せて、私たちが都内のマンションに住むことになりました。

私が料理、息子が洗濯の係で、週に一度、妻が掃除にきてくれました。私が帰宅するのは早くて午後9時。帰宅後に私が作った簡単な料理を2人で食べました。週に2回くらいは近くの焼肉屋などで外食です。2人だけの生活ですが、どんな会話があったのか私は覚えていません。学校のことは息子からではなく、妻から聞きました。大学進学のことも妻に相談しながら決めていたのだと思います。

東大の文科Ⅱ類に合格との知らせを聞いた時は、自分の時以上にうれしかったと記憶していますし、経済学部を選んだということは「もしかしてヤオコーに入る気持ちもあるのかな」と思いました。大学へ進学する時「ビジネスの世界に入るなら、ヤオコーもいい会社だよ」とだけ伝えました。そして、ヤオコーに入社する時には一言だけ「社員を大切にしてほしい」と言いました。

私の家族との関わりを考えても息子が後継者の資質を持った人材に育ってくれたのは、妻のおかげです。「子供は母親だ」とつくづく思います。後継者づくりは嫁さんをもらう時から始まっているのかもしれません。

日経MJ 2019年7月17日掲載

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。